

戦乱の時代だからこそ、 新しい秩序が求められた

戦国時代に突入した 3つの要因

戦国時代の始まりには1467年の「応仁・文明の乱」とする説が一般的である。だが、もうひとつに最初の大がかりな下剋上である1491年の北条早雲の伊豆征庄におく説がある。

しかし、ではいつ戦国時代は終わったのか？ については諸説ある。秀吉が天下統一を成し遂げた1590年であるとする説もあるが、その後も関ヶ原の合戦、大坂夏の陣・冬

の陣などという大規模な合戦が起ころうしているため、完全に戦乱の世が終わるのは1615年。豊臣家が滅亡し、徳川家康が安定政権を確立したときである。

この間、100年以上も戦争に明け暮れていたわけだが、当時の人々は、何も好きこのんで殺し合いをしていたわけではない。日本列島全体が戦闘状態に陥ったのには、3つの大きな要因があった。

まず第1の要因は、「室町幕府」という当時の日本列島の政府の統治力が低かったことだ。室町幕府は日

本の政権を握ってはいしたが、全国津々浦々にまで支配力がおよんでいなければ、各地に守護という地方官職を派遣し、その守護が守護代・国人領主といった在地の有力武士を通じて統治していたのである。しかも幕府は内部対立が続いたために政治機能が不安定であり、直属の軍勢もわずか3000名ほどしか持たず、民衆への支配を強めようとしても実力が足りなかった。

第2の要因は、このように幕府の統治力が弱い一方で、地方勢力の自立意識が高かったことだ。各地の民衆は「惣村」と呼ばれる自治組織を形成し、幕府・守護の支配のやり方が気に入らないときは、しばしば武装蜂起して反抗していた。

そして第3の要因は、当時の日本

戦国時代の流れを掴むポイント

が天災続きで、飢え死にが続出するほどの深刻な食糧不足に陥っていたことである。

幕府があてにならず、そのままでは飢え死にするとあつて、民衆の危機感も募つた。そのような民衆の危機感を受ける形で、各地域の新しいリーダーとして名乗りを上げたのが「戦国大名」と呼ばれる人々だった。彼らは在地の武士や農民たちを統率し、近隣諸国を武力にまつて侵略することで、より多くの農地を獲得し、自分たちが生きるために必要なだけの食糧を確保しようとしたのである。

一般にこの時代の主役は、「戦国大名」と呼ばれる各地の有力武将たちだといわれる。そのため戦国時代は、彼らの武勇伝で彩られた面だけ

に目が向けられやすい。しかし、彼らは「天下を手中にしたい」という自分たちの野望のために自分勝手に争つたのではなく、民衆の要求に従い、民衆のために戦つたのだといえる。そのため、戦国時代の真の主役は民衆だったといえるかもしれない。

戦国時代を終焉に導いた「喧嘩両成敗法」の思想

また、戦乱に明け暮れた時代はさぞかし無秩序な時代だったろうと思われがちだが、必ずしもそうではない。むしろ、戦乱の世であるからこそ秩序が求められた。

なにしろ兵の数が多く、統率がとれ、しかも物資が大量にある軍勢のほつが強いに決まつている。そのような軍勢をつくるには、国内を厳格に

統治する政治システムが必要だ。戦乱の世を生き抜くために、各国の大名たちは領国内に新しいルールを打ち立てなければならなかつたのだ。

そのために各大名は「分国法」と呼ばれる体系的な法律をつくるようになるのである。

この分国法には、領国内の紛争解決手段として行われていた決闘・私闘を禁止する、喧嘩両成敗法が取り入れられた例が多い。武士どうしの紛争の決着をつける権限を大名に集中させることで、国内の紛争を抑えようとしたのである。

この考え方は、後の秀吉の「惣無事令」にも受け継がれ、やがて戦乱の世を終結させる手段として用いられていく。

西暦

出来事

応仁の乱

戦国時代がここから始まる

1488年

1491年

1526年

1543年

1549年

1560年

1568年
1570年

加賀の一向一揆
北条早雲、堀越御所攻め。伊豆二国を手に入れる

本格的な下剋上の世の中の到来

今川氏親、「今川仮名目録」を作成する

鉄砲伝来

戦乱の激化を促す

フランシスコ・ザビエル来日

キリスト教が伝来する

桶狭間の合戦

織田信長、今川義元を打倒。
戦国大名として名乗りを上げる

信長、足利義昭を奉じて上洛

石山本願寺が信長に抗戦。石山合戦スタート

西暦

海外の出来事

1445年頃
1453年

グーテンベルクの活版印刷発明
ビザンツ帝国滅亡
百年戦争終結

1492年

1517年

1519年

1524年

1534年

1543年

コロンブスアメリカに到達
ルターによる宗教改革
マゼラン、世界一周
ドイツ農民戦争
イエズス会の成立
コペルニクスの地動説

1552年

1555年

1562年

1568年

ドイツ・フランス戦争

アウグスブルクの宗教和議

ユグノー戦争

オランダ独立戦争勃発

戦国時代の流れを掴むポイント

戦国時代の主な流れ

1615年	1614年	1603年	1600年	1598年	1597年	1592年	1590年	1585年	1583年	1582年	1580年	1576年	1573年	1571年
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

比叡山延暦寺焼き討ち

信長、將軍・足利義昭を追放。室町幕府滅亡へ

信長、安土城築城

石山合戦終結

本能寺の変

信長横死

豊臣秀吉、大坂城築城

秀吉、関白に就任する

北条氏滅亡、奥州平定により、

秀吉による天下統一が完成

朝鮮出兵(文祿の役)

朝鮮出兵(慶長の役)

秀吉、死去

関ヶ原の戦い

徳川家康、征夷大將軍に任命される

江戸に幕府を開設

方広寺鐘銘事件

大坂冬の陣

大坂夏の陣

徳川政権の時代に

1620年	1600年	1598年	1588年	1571年
-------	-------	-------	-------	-------

レバントの海戦

イギリス海軍、スペインの無敵艦隊を撃破

ナントの勅令

イギリス、東インド会社を設立

ピューリタン(清教徒)がメイフラワー号で北アメリカへ渡る

戦国時代の意義

戦国時代は日本が統一国家になるための転換期だ

戦国時代になって群雄が割拠したのではない。日本列島は昔から群雄割拠の状態だったのだ。天下統一事業は根本的な時代の大変革だった。

群雄割拠的状况だった日本列島

1467(応仁元)年に勃発し、1477(文明9)年に終結した応仁・文明の乱を契機として、日本は群雄割拠の戦国時代に突入する。「群雄」とは各地に蟠踞している有力者のこと。戦国大名 p.30(参照)と呼ばれる人々だ。

応仁・文明の乱以前、日本の代表政府は「室町幕府」だった。ところが乱によって、幕府の政府としての機能・権威は完全に失墜。各地の有力者たちは、おおかたが、頼りない幕府は「ヤダ!」とばかりに、独立歩歩の道を歩みはじめた。彼らは、自分の土地を富ませようと躍起になった。しか

し、ただでさえ狭い日本列島の中にある、さらに狭い土地だ。得られる物資は限られている。勢い、他人から掠めとらざるを得なくなる。群雄入り乱れての戦乱が起つたのはそのためだ。

戦国時代は日本国改造の胎動期

ところで、「群雄割拠」というと、戦国時代特有の状況に思っつかもしいないが、そうではない。その遙か昔から、日本列島はある意味で、群雄割拠的な状態にあつたといえる。

弥生時代、日本列島に国家らしいものができはじめる。集落の周囲を濠で囲んだ「環濠集落」などは、三国家の典型だ。三国家は集合離散を繰り返し、やがて大和朝廷が台頭。古代日本の代表政府として、平安時代中期まで日本列島を支配する。それ以後、平安時代後期になって平清盛が立てた平氏政権から、鎌倉幕府、室町幕府へと、日本の「政府」は変わっていく。

平和な群雄割拠状態から戦乱の世へ

弥生時代～室町時代の日本



全国各地に地方勢力が存在。朝廷や幕府は、地方の有力者らを通じて、間接的に全国を統括していたにすぎない

室町幕府の
信頼失墜

地方勢力の
自意識の高まり



戦国時代は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の3人の天下人によって終結する。彼らが成し遂げた「天下統一」は想像以上の難事業だった。理由は簡単で、単に割拠する群雄を平らげることでなく、日本列島に長く続いてきた群雄割拠的な政治状況を根底から覆すことでもあったからだ。その意味においても戦国時代は、日本国が真の統一国家へと移行するための胎動期であり、日本史上の一大転換期でもあったのだ。

しかし、これらの政府は日本列島全体を完全に統治できていたわけではなかった。たとえば中世初期、奥州では奥州藤原氏が、膨大な黄金の力を背景に、平泉を拠点とする半独立国を構えていたし、同じ中世期、青森県十三湊を拠点とした安東氏は、奥州十三湊日本將軍と名乗り、独自に海外と交易、莫大な利益を得ている。要するに、

日本列島の中に半独立勢力がいくつもあつたのである。室町時代までは地方勢力は互いに平和的に共存していたが、応仁の乱により、彼らを緩やかに支配していた室町幕府の権威が大幅に失墜する。これを機に、昔からの群雄割拠的に存在していた地方勢力の自意識が急速に高まり、戦乱の時代に向かつていくのである。

戦国時代は「鉄砲伝来」を境に大きく2つに分けられる

ヨーロッパから伝来した超ハイテク兵器・鉄砲は、戦争のやり方ばかりでなく、「兵農分離」を促すなど日本社会のあり方も変えた。

農繁期は戦争をしなかった戦国時代前期

戦国時代という『毎日戦争をしていた時代だ』と思いがちだが、それはあくまで戦国時代後半の話だ。前半はそれほど激しい戦乱状態ではなかった。

その理由は農業にある。この頃の社会は「兵農未分離」の状態で、武士たちは戦争があるときは軍役についてだが、それ以外のときは農業を営んでいたのだ。侍大将など大名の武将クラスの侍はたいして、土地の有力者を兼ねていた。

また、この頃は商業経済が浸透してきたとはいえ、まだ農業経済に依存する部分も多かった。大名は農産物を税

として受けとり、それを売ることによって貨幣を得て、軍資金としていた。農産物が入らないことには、軍隊は出動することができない。今も昔も戦争には莫大な金が必要だ。ために戦国武将たちはみな、春の田植えや秋の収穫の時期など、農繁期には極力戦争を避けたのだ。

ところがこの状況は、1543年（天文12）年に起ったある事件を境に一変する。「鉄砲伝来」である。

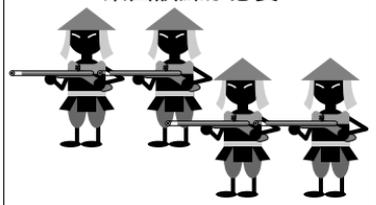
戦国版超ハイテク兵器の登場

ポルトガル人がもたらした鉄砲は、戦国時代のあり方を根底から揺さぶった。鉄砲は当時、日本にある武器のどれよりも殺傷能力が高かったから、戦国大名たちは先を争うようにして鉄砲を入手しようとした。ところがこの鉄砲、超ハイテク兵器だけに値段も張る。明国の侯継高が著した『日本風土記』によれば、鉄砲が出回りはじめた頃、一挺の値段は20余両。一両を25万円として換算すると、500万

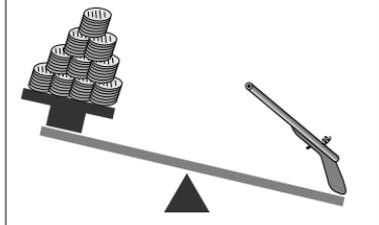
鉄砲が戦国社会に与えたインパクト

1543年 鉄砲が伝来するが.....

実践で使うには大量装備
集団訓練が必要



しかも大量装備には金がかかる



兵農分離

武士を職業軍人化させるとともに、農業経済・商業経済を強化。おのずと戦乱も激化へ.....。

円余りにもなったという。しかも、一挺二挺が火を噴いても意味がないから、どうしても大量装備が必要になる。射撃手も問題だ。当時の鉄砲には、一度発砲すると、次の弾の装填に手間どるといふ最大の弱点があった。おのずと相應の訓練が必要になる。大量の人間に鉄砲を持たせ集団訓練を施すとすると、農業といふ本職を持っている武士ではどうしても駄目だ。となると、大量の足輕(あしけ)戦争を職業とするプロの傭兵(ようへい)を雇い入れ、訓練する必要がある。ちなみに、この問題に対して革新的解決策を見いだしたのは、戦国三大武将の一人である織田信長だった。信長は、武士たちを城下に住まわせて土地との関係を切り離し、商業経済を推進。富が自分の手に集まるようにし、得た金を給付金として支払った。この「兵農分離」により、武士は半農半武から職業軍人へと変わり、集団訓練も可能になっていく。

こうして鉄砲による集団戦術は、すべての大名にとって必須なものとなっていった。そのため、税金の徴収や戦闘訓練も厳格になり、戦国大名たちは領国に対する支配を強めた。そして、戦乱も鉄砲出現を機に、本格的に激しさを増していったのだ。

100年の戦乱の世がはじまった原因は室町幕府にある

政府としての基盤が著しく弱かった
室町幕府。その脆弱さが、応仁・文
明の乱を誘発し、時代を戦乱へと
導く大きな要因となつた。

内部対立に明け暮れていた室町幕府

日本の歴史の中で、幕府は三度生まれている。鎌倉幕府・室町幕府・江戸幕府だ。このうち、鎌倉幕府と江戸幕府は、將軍と家臣たちが強固な主従関係で結ばれ、しつかりした政治基盤を持つ政権だったのに対し、室町幕府は足利將軍家の影響力が弱く、政治基盤も脆弱だった。

「幕府」とはもともと、朝廷に任命された、征夷大將軍せいゐだいしょうんいわゆる將軍のことことが、つづいた政治拠点のことをいう。つまり、幕府は形式的には朝廷の一機関のようなものだった。武士の政治力・軍事力が高まるにつれ、朝廷の実権は失わ

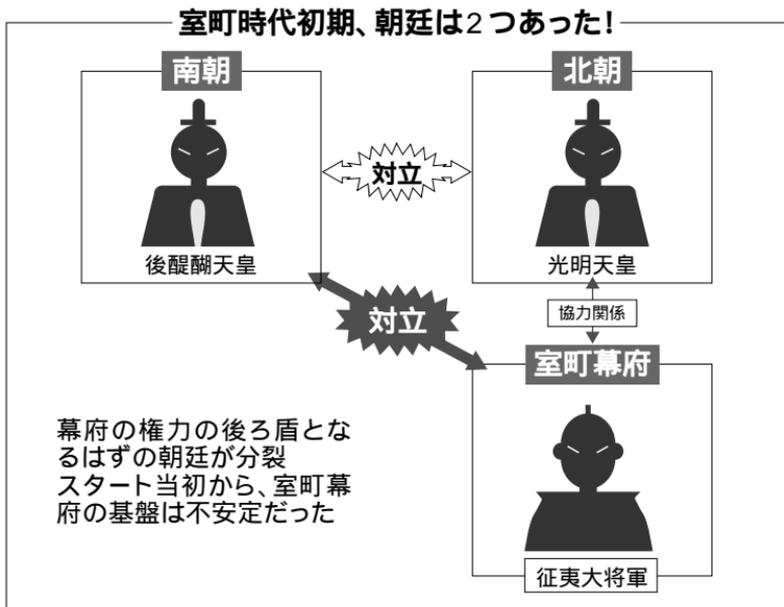
れ、次第に幕府が日本の政権を握るようになるのだが、武家政権は朝廷を打倒することはなかった。というのも、実権は失つたにもかかわらず朝廷の権威は別格であり、幕府は、朝廷の後ろ盾を得ることで、その権力を支えてもらう必要があつたのだ。

ところが、室町幕府がスタートした当初、朝廷は南朝と北朝に分かれていた。幕府は、南北に分裂していたうちの北朝だけに支えられており、それだけスタート時点から権力基盤が弱かつたといえる。

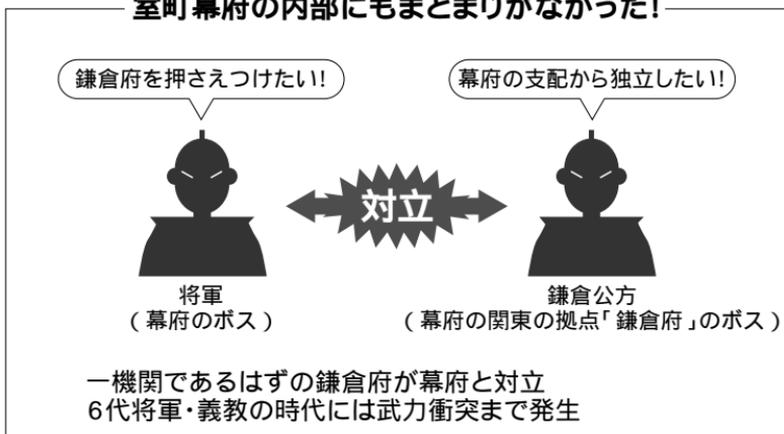
南北朝の分裂は足利義満よしみつ（3代將軍）の時代に終わつたが、その後は幕府の内部で政治的な対立が相次いだ。幕府は関東地方に、鎌倉府かまがらふという機関を設置しており、特にこの鎌倉府と幕府との対立が激しかった。鎌倉府は幕府からの自立意識が強く、幕府はしばしばこれを牽制した。

室町幕府の政治力が大きく失墜したのが、6代將軍の義教よしかの時代だ。彼は幕府の権力を強めるために、専制政治を

室町幕府の信頼が低かった2つの要因



室町幕府の内部にもまとまりがなかった！



室町幕府の支配力の弱さが戦国時代を到来させる遠因だった